様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１３５３２

研究課題名（和文）留学生と地域住民とのコミュニティ形成および社会的包摂を促す国際共修の実践研究

研究課題名（英文）International Collaborative Learning that Promotes Community Building and Social Inclusion between International Students and Local Residents - A Practical Research

研究代表者
中野　遼子（Nakano, Ryoko）

東北大学・歯学研究科・講師

研究者番号：３０８０１２９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：「留学生と地域住民とのコミュニティ形成を促す国際共修」として、大阪大学周辺にある2つの商店街やその周辺地域での「インターンシップ実習」の授業（以下、本授業）の①教育的効果、②そのコミュニティ形成の成功要因、③地域社会のインクルーシブな環境づくりの促進要因の検証を行った。その結果、留学生が学外のコミュニティに入り、地域住民と対話することで、社会問題への関心の向上、学外での居場所の獲得、将来設計への影響、という教育的効果を得ていることがわかった。さらに、本授業のコミュニティ形成とインクルーシブな環境づくりの促進要因として、留学生と地域住民をつなぐ「地域エージェント」の存在の重要性も示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究からは、留学生との継続的な交流により、地域住民が国際交流経験を得ること、特に若い世代の将来設計に影響していることが明らかとなった。また、留学生側は、自身も言語的ハンディキャップを抱える立場で日本の様々な社会福祉施設を訪問し、そこで活動する地域住民と交流することで、留学生の内面の変化、地域での居場所の獲得、将来設計への影響等の結果が得られた。このように、まだ先行研究が少ない「地域と連携した国際共修」研究に、対話を取り入れた新しい国際共修モデルを提示することができた。さらに、地域住民と留学生の相互の学びを促す「地域エージェント」という概念を創出し、社会的にも有意義な研究結果が得られた。

研究成果の概要（英文）：Regarding "International Collaborative Learning to Promote Community Building between International Students and Local Residents," we investigated the (1) educational effects, (2) success factors in community building, and (3) factors that promote the creation of an inclusive environment in the local community. The results showed that international students' participation in off-campus communities and dialogue with local residents had the following educational effects: increased interest in social issues, acquisition of a place outside the university, and influence on their future plans. The study also suggested the importance of having "Regional Agents" to connect international students and local residents as a facilitating factor for community building and creating an inclusive environment in this course.

研究分野：留学生教育、異文化コミュニケーション

キーワード：留学生支援　国際共修　地域交流　地域インターンシップ　インクルーシブな共生社会　地域コミュニティ　社学連携

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

日本の大学においては、留学生が増加し、また、多国籍化している（JASSO, 2020）。しかし、大学側の受け入れ体制は十分とはいえない。留学生同士のコミュニティは形成されやすいものの、日本の学生（以下、国内学生）を含む地域住民と留学生とのコミュニティは形成されにくい（小松, 2013 他）。留学生の中には、慣れない国での対人コミュニケーションや生活に困難を感じている学生も多く、強いストレスやメンタルヘルス不調を抱える学生もいる（加賀美, 2007）。このような留学生の学習・生活上の不安やストレスを軽減するには、大学側のサポートだけでなく、留学生が地域住民とのコミュニティを形成し、必要なときにはサポートを求められる関係を築くことが重要である。そのためには、大学教員が地域住民と協力して適切な介入をしながら、コミュニティ形成の「きっかけ」を提供することが有効である（加賀美, 2007）。
近年、その「きっかけ」として、「国際共修」が注目されるようになった。国際共修とは、「多様な言語・文化背景の学生が、意味ある交流（meaningful interaction）を通して学び合う授業・活動形態」（末松・秋庭・米澤，2019:ii）のことである。国際共修の学習者は、大学生だけではなく、地域社会の住民や初等中等教育機関に学ぶ児童・生徒など、世代や立場を越えた多様な人びとも含んでいる（末松ら，2019）。そのため、地域社会と連携した国際共修研究も進められている。しかし、大学内の国際共修の実践事例がここ数年で急増しているのに対し、地域と連携した学外での事例報告は現段階ではまだ少ない（島崎，2019）。

以上のような背景から、本研究の学術的問いは、「留学生と地域住民とのコミュニティ形成を促す国際共修の効果とその成功要因とはどのようなものか」である。具体的には、国際共修プログラムのもたらす何がコミュニティの形成という社会的現象を生じさせるのかについて、その構造とプロセスの側面から理論分析を行う。

## ２．研究の目的

本学では、2020 年度に、英語プログラムの交換留学生を対象として、2 つの商店街（池田市石橋商店街および吹田市旭通商店街）とその周辺地域でのインターンシップ実習（以下、地域インターンシップまたは本授業）が新設された。本研究では、商店街インターンシップを「国際共修」として着目し、留学生と地域住民とのコミュニティ形成を促す国際共修の教育的効果とその成功要因の解明を目的としている。具体的には、①国際共修の効果検証：留学生と地域住民の交流が双方にどんな教育的効果をもたらし、またどの程度コミュニティ形成がなされるのか、②コミュニティ形成の要因分析：①のコミュニティ形成効果は、国際共修という活動がもたらすどの要素が要因となっているのか、③インクルーシブな地域社会とそれをもたらす国際共修のモデルの提示、という 3 点を研究課題とし 3 年間の調査を進めた。

## ３．研究の方法

文献調査を基に、BEVI テストおよびインタビューを実施し、地域インターンシップにおける相互の教育的効果とコミュニティ形成効果を検証した。

特にインタビュー調査については、地域インターンシップを通して、①留学生と地域住民の交流が双方に与える教育的効果、②留学生と地域住民とのコミュニティ形成を促進する成功要因、③地域社会のインクルーシブな環境づくりの促進要因、に関連する質問を留学生と地域住民に行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を援用して解明を試みた。さらにそこから、他の地域においても活用可能な要因を特定し、様々な文化的背景を持つ人々と地域住民との交流を促す国際共修モデルの提案を行う。

インタビュー調査については、地域インターンシップ参加学生 6 名（以下、インターン学生）と地域住民 10 名、計 16 名から協力を得た。この 16 名を以下、協力者と呼ぶ。

インタビュー調査は、パイロット調査も含めて、2020 年から 2023 年の間に、対面およびオンラインによる個別面談として実施された。インタビューに要した時間は 60～90 分である。インタビューは協力者の許可を得て録音され、文字化された。インタビュー方法は、協力者全員に同じ質問に答えてもらう必要があったが、自由に語ってほしかったため、半構造化インタビュー法を用いた。質問内容は、協力者に対して、主に、(1) 授業の振り返りと授業で学んだこと、(2) 留学生と地域住民の人間関係、(3) 地域社会のインクルーシブな環境づくりに必要なこと、という 3 点について尋ねた。また、補助資料として、受講者全員に実施したアンケート調査も参考にした。

本調査の倫理的配慮として、本研究が研究倫理を踏まえており、研究目的のみのデータ使用、匿名性への配慮、データの使用をいつでも拒否できることについて文書で伝えた。データ使用の際には協力者に不利益が生じないよう細心の注意を払った。

## ４．研究成果

本授業における地域住民と留学生との交流が、相互の学びにどのような影響を与えているのかについて質的な分析を行った。その結果について、留学生と地域住民別に述べていく。

**(1) 留学生に与える教育的効果**

本授業のインターン学生は、様々な立場の地域住民と、多様な文化的背景を持つ参加学生とが共に活動し対話することで、a) リアルな日本社会の理解、b) 社会問題への関心の高まり、c) 自己開示の実現（自分のこと、特に人に話せないことについて話せるようになる）、d) 留学生バブルからの脱出、e) 日本での居場所の獲得、f) 将来設計への影響、という 6 つの学びを経験していることが明らかとなった。

**(2) 地域住民に与える教育的効果**

地域住民は、留学生との交流を通して、1) 日本文化の再発見、2) 商店街の再発見、3) 留学生への親近感、4) 積極性の獲得、5) 商店街の国際化に向けた気づき、という 5 つの学びを得た。特に、3)と 4)の 2 点については、普段の生活において国際交流経験が少ない地域住民にとっては影響が大きかった。ある中学生は、留学生との交流により、これまで興味のなかった英語を勉強するきっかけとなり、高校受験では英語科に合格した。このように、留学生との交流が地域住民の進路に影響を与える事例も観察することができた。

**(3) 留学生と地域住民とのコミュニティ形成の成功要因**

さらに、協力者へのインタビューにより、留学生と地域住民とのコミュニティ形成や地域社会のインクルーシブな環境づくりを促進するためには、留学生と地域住民に対して、1) パイプ役、2) 通訳、3) 監督、4) ロールモデル、という 4 つの役割を持っている「地域エージェント」の存在が重要であることがわかった。

地域エージェントとは、Wenger (1998)が述べている、「ナレッジ・ブローカー」を参考としており、「同時に複数のコミュニティに所属し、共同体を越えて新しいつながりを作り、コミュニティ間の交流を促進することで実践を仲介し結びつける存在」（Wenger, 1998）のことである。本研究では、Wenger の概念を参考に、地域と別のコミュニティをつなげる人のことを「地域エージェント」と呼んでいる。地域エージェントを媒介として形成される様々な地域住民との「弱い紐帯」（Granovetter, 1973）が、インターン学生の変化や教育的効果に大きな影響があることもわかった。

上記の教育的効果や留学生と地域住民とのコミュニティ形成を促す本授業は、以下の 5 つの特徴がある。

① インクルーシブな環境作りをテーマにしているインターンシップであること
② インターン学生の内面の成長を授業の教育目的にしていること
③ はじめからプログラムが固定されておらず、地域の新しい人とつながっていく強みがあること（弱い紐帯と関連）
④ 授業に対話の時間を取り入れて、学生同士や地域の人々との理解を深めていること
⑤ 学生個人のバックグラウンドを深く知ることで、プログラムをコーディネートしていること

これらの点は、様々な文化的背景を持つ人々と地域住民との交流を促し、地域社会のインクルーシブな環境づくりを促進する国際共修モデルに重要であり、新しい国際共修モデルを提示することができた。

ここで、本授業の実施体制を図 1 として示す。まず、地域エージェントが地域住民との訪問場所や日時を調整し、留学生と地域住民との対話を通した交流を設定して、授業実践を行っている。そして、授業計画・実施の段階から大学教員が関わり、授業実施後の振り返りやフィードバックを行うことで、大学側が地域エージェントと協働して授業の改善を続けている。このように、本授業は、地域エージェントを支える体制が整備され、留学生への教育の質保証がなされている。

図 2 は、4 つの授業実践を繰り返すことで、インターン学生が 5 つの学びを獲得している、という本授業の学習プロセスを示している。

以上のように、本研究からは、地域住民と留学生との交流と相互の学びを促す国際共修モデルに重要な「地域エージェント」という概念を創出することができた。

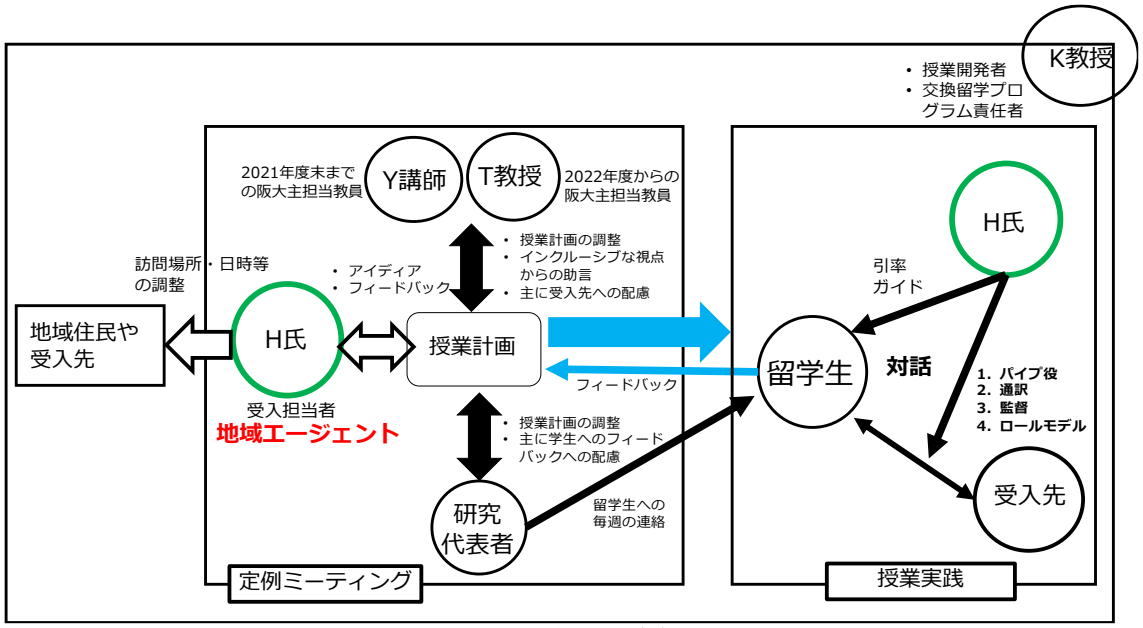


図 1 本授業の実施体制

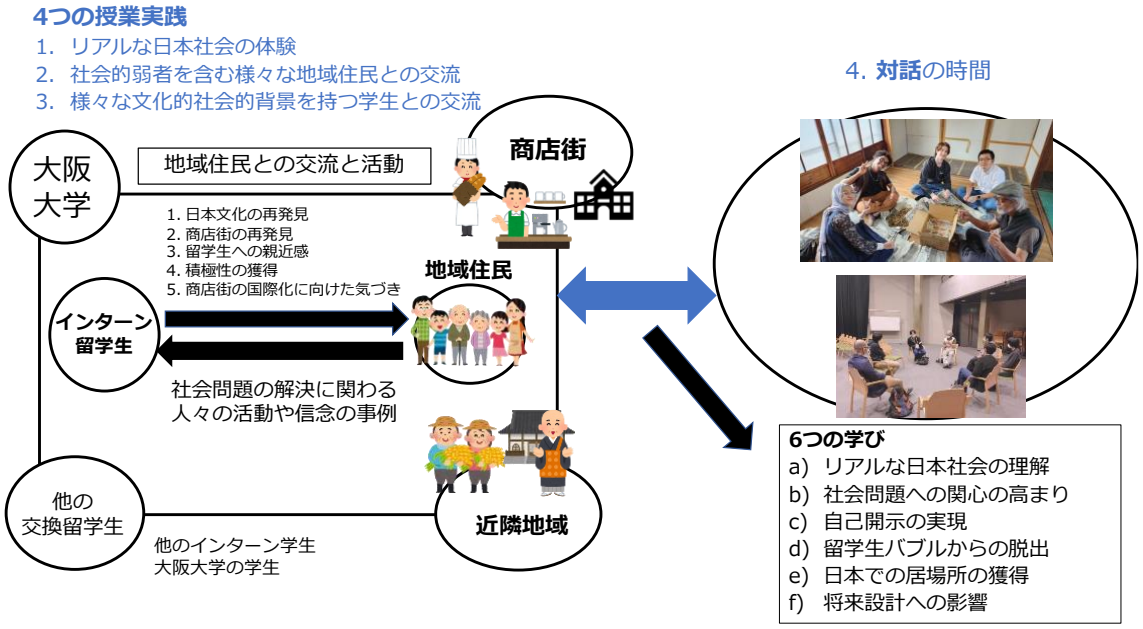


図 2 本授業の学習プロセス


参考文献

Granovetter, M.S. (1973). The Strength of Weak Ties, *American Journal of Sociology*, 78:6, 1360-1380.

JASSO (2020)「2019（令和元）年度外国人留学生在籍状況調査等について」2020 年 4 月 23 日 https://www.jasso.go.jp/about/information/press/jp2020042301.html (2020/09/05 閲覧)

Strauss, A., & Corbin, J. (1998) *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory*, (2nd ed.), New York: Sage.

Wenger, E. (1998). *Communities Practice: Learning, Meaning, and Identity*. UK: Cambridge University Press.

稲葉 陽二（2011）『ソーシャル・キャピタル入門 ―孤立から絆へ』中公新書

加賀美常美代（2007）「第 11 章 大学キャンパスにおけるコミュニティアプローチによる留学生支援」箕口雅博（編）『臨床心理地域援助特論（07 放送大学大学院教材）』161-176 日本放送出版協会

木下康仁（2007）『ライブ講義 M−GTA―実践的質的研究方法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて―』弘文堂.

小松翠（2013）「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』12: 71-86.

島崎薫（2019）「地域社会との連携で行う国際共修」末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編著『国際共修―文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』185-209　東信堂
末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編著（2019）『国際共修―文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂
中野遼子・渡邉泰久・菱田伊駒（2020）「地域住民と留学生との交流に関する実践報告―2 つの商店街における留学生受け入れの影響を中心に―」2020 年 10 月 24 日　多文化関係学会第 19 回年次大会（近畿大学　オンライン）（学会発表、審査有）
西谷元（2018）「留学体験の客観的測定 : BEVI を用いて (小特集 海外留学体験の効果測定に対する取り組み : 海外短期派遣プログラムを中心に)」『大学時報』67(380): 74-79.
西村宏治・浅倉拓也（2020）「外国人と商店街　遠くて近い二つを結ぶと、未来が見えた」『朝日新聞 GLOBE＋』2020 年 3 月 12 日　https://globe.asahi.com/article/13202271（2020/8/20 閲覧）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　3件／うち国際学会　5件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nakano, R. |
| ２．発表標題<br>Global Internships in the New Normal Era |
| ３．学会等名<br>JAISE-KAIE Joint Seminar 2024（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2024年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Mason, L., Nivern, D., Rost, N. & Nakano, R. |
| ２．発表標題<br>Flexibility vs. Face-Time: The Future of Work and Learning |
| ３．学会等名<br>CIEE Global Internship Conference (GIC) 2023（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nakano, R., Kondo, S., Tachikake, T. & Hishida, I. |
| ２．発表標題<br>Challenges of English Language Internship Course in Non-English-Speaking Communities: Focusing on the Transformation of Students’ Inner Selves |
| ３．学会等名<br>International Internship Conference (IIC) 2023（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nakano, R. & Kondo, S. |
| ２．発表標題<br>Comparing two Internship Courses for International Students under Local Communities |
| ３．学会等名<br>NAFSA 2023 Annual Conference & Expo（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Nakano, R., Watanabe, Y. & Hishida, I. |
| ２．発表標題<br>Internship Course for International Students in Cooperation with Local Communities |
| ３．学会等名<br>APAIE 2023 (Asia Pacific Association for International Education)（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中野遼子・渡邉泰久・近藤佐知彦・菱田伊駒 |
| ２．発表標題<br>対面とオンラインによる地域と連携した国際共修の実践報告 ―商店街における留学生受け入れの教育的効果を中心に― |
| ３．学会等名<br>多文化関係学会第21回年次大会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中野遼子・菱田伊駒・山森裕毅 |
| ２．発表標題<br>交換留学生を対象としたインターンシップ実習の実践報告と考察 |
| ３．学会等名<br>第8回マツダ財団サロン（招待講演） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>中野遼子・山森裕毅・菱田伊駒 |
| ２．発表標題<br>交換留学生を対象としたインターンシップ実習の実践報告 －豊中キャンパス周辺地域におけるインクルーシブな環境づくりを学ぶ－ |
| ３．学会等名<br>第6回 大阪大学豊中地区研究交流会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---|---|---|---|---|
| オーストラリア | University of Melbourne | | | |
| 米国 | IIE | Arizona State University | Silicon Allee | |
| 英国 | Virtual Internships | | | |